
バカとAクラスと試験召喚戦争

LEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとAクラスと試験召喚戦争

【Nコード】

N3747Y

【作者名】

LEN

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次創作物です。小学校の頃離れ離れになったった明久の親友、長谷川芳樹はある仕事を学園長に頼まれ明久をAクラスに……。明久とオリキャラ芳樹を中心にAクラスで馬鹿騒ぎをする、そんな話です

・・・今まで、書かせてもらっていたバカとAクラスと試験戦争の一学期からスタートする作品です。よろしく願います。

プロローグ（前書き）

今まで書いていた小説『バカとAクラスと試召戦争』、もしくは『バカとテストと隣人部』を読んで下さっていた皆様、本当に申し訳ありませんでした！

色々あって自分の作品は全て削除されたのですが、また頑張っていくと思っています・・・更新スピードはドンガメ確定ですが。

まあ様、糖分摂取魔様、バカと不幸様、GAU様、活動報告へのコメントをありがとうございます。おかげで少しやる気が出てきました！

それではどうぞ！

プロローグ

季節は春、ある学園へと続くこの道には桜の花が満開に咲き誇っている。今日から生徒たちはまたこの道を歩き続けることになる。学園と聞けば勉強をするのが面倒で暗い顔をしながら登校する者少なくはないだろう。だがそんな顔でこの桜を潜る生徒は誰一人としていなかった。新しい友達と新しいクラスで新しい一年が始まるそう、今日は始業式。・・・世間で最も話題を呼ぶ新技術『試験召喚システム』をいち早く採用している学園・・・・文月学園の始業式である。

「吉井、遅刻だぞ」

校門の前で、ドスの聞いた声で呼び止められる生徒が一人。時間が時間であるため走り続けた生徒はその声に立ち止まった

「あ、鉄じ　じゃなくて、西村先生。おはようございます」

「今、鉄人って言おうとしなかったか？」

「ははっ、気のせいですよ」

・・・・ドスの聞いた声の持ち主である西村宗助教諭。生徒たちから生活指導の鬼と呼ばれる先生に対し立ち止まった生徒はいつも

の様にごまかす、

「それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろうか」
「あ、すいません、えーっと 今日も肌が黒いですね」

「……お前には遅刻の謝罪より俺の肌の色のほうが重要なのか？」

「そつちでしたか。すいません」

「……遅刻しているにも関わらず、教師に冗談を振るうことのほうが重要なのかと突っ込みたくなる気持ちはあるがこの少年は『バカ』であるからしょうがないと言えましょうがない。1年生の時から仲間と一緒にバカを繰り返し、遂には『観察処分者』と言うこの学園で最も貼られたくないレッテルを貼られ、そんな中でもバカを繰り返す。これがこの少年 学園至上の大馬鹿野郎、吉井明久だ

「まったくお前と言うヤツは……いくら罰を与えても全然懲りないな」

「先生。僕、遅刻はあまりしてないですよ」

「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

西村教諭は箱から封筒を取り出し、明久に差し出す。宛名の欄には『吉井明久』と言う文字が大きく書かれてある。……だが、そこには少しだけおかしいところがあった。明久は一応頭を下げた西村教諭から封筒を受け取る

「あ、どーもです。……それにしてもどうしてこんな面倒くさいやり方でクラス編成を発表しているんですか？掲示板とかでドーンと張り出したほうがどう考えても楽なのに……」

「この学園には色々事情があるだろう？最近は大企業なんかでも少

しずつ使われてきている。『試験召喚システム』だが元々の発信源はここだからな。ここだけが最先端システムを使っていたときの名残だ」

「ふーん、そういうものなんですかね」

適当に相槌を打って答える明久だが、内心ではすごくドキドキしていた。何故ならここ、文月学園は実力主義の高校でAクラスからFクラスまでのクラスは全て成績順によって決まる。つまり、より頭の良い者がAクラスでより頭の悪いものがFクラスということになる。

「……余談ではあるが、新技術『試験召喚システム』は大企業などで使われるようになった。仕事が捗ったりとメリットも多いのだが、かなりの資産が掛かりシステムの大量生産するのが現在の技術では難しく、使いたくても使えないと言う企業が増えてきているそう」

「……って、開いてある……というか一回開けられてる？」

「吉井、今更なんだがな。俺は今までお前のことを馬鹿なんじゃないかと思いつけてたんだ」

「まあバカなのは認めますけど……僕だつてやるときはやるんですよ？」

「ああ、俺はどうしてお前がそのクラスになつたのが理解できない」

「……ってことは悪かったのかな？と、思いながら明久は封筒を開ける。するとそこには……大きなFの字が……」

×をつけられてその横に小さく、Aクラスと書かれていた

「……って、えええ！？……僕が……Aクラス？」

「そうだ、俺としては信じがたいんだが……お前、何をしたんだ？」

「何も怪しいことはしてないですよ！！どうしてそう疑うんですか！」

「流石に冗談だ。お前がそういう待遇になった理由は聞いている。」

「待遇？、ってことは僕。誰かにAクラスにさせてもらえたんですか？」

「そういうことだ。ちなみにお前の振り分け試験の結果は496点、学年で唯一500点を切っていた。……最後に言っておく」

西村教諭はもう跡に誰もいないことを確認したのか、箱を片手に持ち校舎に入っていく。途中で明久の方を見て

「どこのクラスになろうと……お前はバカだ」

こうして学年最底辺の大馬鹿の、最高クラスでの生活が幕を開けた

プロローグ（後書き）

感想をお待ちしております

オリキャラ紹介＋今までとの違い

キャラ紹介

はせがわ よしき
長谷川 芳樹

所属・・・文月学園2 Aクラス

容姿・・・悪くはない、髪は濃い赤茶にストレート

成績・・・学年主席レベルで抑える

その他・・・明久の小学生時の幼馴染で、世界に数少ない神童の一人。

身体は細いが喧嘩も強く小学生の頃明久とともにやりたい放題やっていた。

両親は小学生の頃に死亡。現在は妹と二人暮らしで家事スキルも上々、基本万能

好きな物はこれと言ってなく一日が楽しければいいや程度。
過去については厳禁、

はせがわ そら
長谷川 空

所属・・・文月学園1 Cクラス

容姿・・・兄とは段違いで良、髪は兄と同じ濃い赤茶で上のほうで束ねてポニテ

成績・・・悪くはない。・・・二年だとD〜C程度
その他・・・芳樹の妹で現在兄と二人暮らし。
明久LOVEで玲は攻略済み。その代わりに玲の影響を強く受けて
いる

今までとの違い

- ・二学期から始まったのが一学期からになった
- ・明久×愛子じゃなくなるかも？
- ・瑞希もAクラス入り
- ・あの人が・・・
- ・空が一歳老けた

オリキャラ紹介+今までとの違い(後書き)

とりあえずこんなところでしょうか

これは随時新しい事実が出るたび編集していきます

第一話

「……これが、……Aクラス？」

明久は教室の前で立ち尽くすことしか出来なかった。……それもそのはず、目の前にある教室の扉だっけで明久の数倍はあった。横を見るとかなり奥に同じような扉とその隣に普通の教室の扉。配置からしてDクラスだ。

「……どんだけ大きいの？……立ち止まってもしょうがないしとりあえず教室に入ろう。」

扉を開けると、中の教卓？のところにこの担任であろう眼鏡を掛けた女性の教師と席？についている生徒全員が明久の方を見てきた。

「え、えつと何故かここに配属されることになった吉井明久です。よろしく願います……」

「……とりあえず、今からHRを始める所だったので席についてください。今は出席順に座ってもらってるので吉井君の席は一番奥の窓側の空いている席です」

「……あ、ありがとうございます」

何とかお礼だけ言って席に向かうが、生徒はみんな明久の方を向いている。去年の事を知っている者が入れば『何でお前が』のような目で睨み付けられたりする。一部の人は面白そうに見たりとそんなプレッシャーに耐えながら何とか席に着く

「・・・それでは全員揃った様なので・・・皆さん進級おめでとうございます。私はこの2年Aクラスの担任、高橋洋子です。よろしくお願ひします。それではまず設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートその他の設備に不備のある人はいますか？」

「（・・・この設備のどこに、不備があるのさ！）」

明久は突っ込みたい気持ちを抑える。実力主義とはいえ、AとDでこれほどの差があるのなら一体Fクラスはどれだけ酷いのだろうか少々気になってしまふ。更に明久は周りを見渡すと、天井は総ガラス製でありながらスイッチ一つで開閉可能となっており、壁には格調高い絵画や観葉植物がさり気なく置かれていた。

「（それにしても・・・Fクラスになる予定だった僕をAクラスに入れたのは誰だろう？流石に見知らぬ人とかじゃないよね）」

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも必要なものがあれば遠慮などすることなく何でも申し出てください。」

「（この冷蔵庫も好きに使っていいの！？、って支給！？そんな事言ったら僕の大好物のカロリーが！）」

「それでは初めにクラス代表と学年主席に出てきてもらいます。姫路瑞希さんと長谷川芳樹君は前に出てきてください」

「（へえ、姫路さんがAクラスの代表なんだ。・・・あれ？でも何で主席じゃないんだろう？クラスの中で一番点数の高かった人になるんだよね。・・・今高橋先生なんて言ってたかな？・・・」

長谷川・・・芳・・・って）長谷川芳樹！？」

呼ばれた二人が前へ出ると、明久は思わず立ち上がってしまった。こればかりは周りなんか気にしていられない。気づいてしまった。

小学生の頃、いきなり目の前からいなくなった唯一無二の大親友・
・
・
・

「はあく、初っ端から調子を崩すなよ。 久しぶりだな、
アキ」

長谷川芳樹がそこにいた

「 吉井君。 何やら感動の再開のようですがとりあえず後に
して下さい。」

「あつ、す、すみません」

「長谷川君、今回あなたが主席じゃない事や吉井君がAクラスにな
った事など、その辺りについての説明をお願いします」

「はあく、分かりましたよ。 でもその前に 姫路、代表とし
て挨拶しろ」

「えっ、は、はい。 この度Aクラスの代表になった姫路瑞
希です。 よろしくお願いします」

あまり気乗りしていないのか芳樹はため息をついてから承諾すると、瑞希に紹介を先に済ませさせる。姫路はいきなりだったので最初戸惑ったが、紹介を無事に済ませた

「……それで俺が今回学年主席になった長谷川芳樹だ、二年生から転入してきた。転入してきたばつかで俺のことなんて小学校の頃一緒だった姫路とアキぐらいしか知るやつはいないだろうがとりあえずよろしく。……まず学年一位になった俺が代表になっていないのは、俺が点数を取りすぎたからだ」

「私も学園長からあまり話を聞いていないのですが、点数を取りすぎたというのはどういうことですか？」

「あのババア……高橋教諭ぐらいには話しておけよ全く……。えーっとな、姫路の出した点数が確か……4024点であつてたか？」

「はい、そうですね。ただそれでも久保君と数点差だったらしくて……。それに霧島さんが……テストにも出たはずなのに本気を出さなかったからこの順位になれただけです」

姫路がそう付け加えると、クラス中が騒ぎ出す。Aクラスの点数は確かに上は高いが下はそこまででもない。Bクラスの上位者と変わらない程度だ。しかしAクラス上位十名はレベルが違う。その頂点で争っていたのが姫路瑞希、久保利光、霧島翔子の三人だった。しかし霧島翔子と呼ばれる女子生徒だけはこのクラスにいない。それはクラス全員が抱えてた疑問だった

「ちなみに霧島翔子はFクラスに行った、なんでも体調が悪くなかったらしい。途中退席で扱いつてことになってる」

「えっ、そうだったんですか？（私も途中退席したのに……、それで吉井君が……）」

「姫路がトリップしてるのはいって、俺が出した点数は……」

6433点だ」

『『『6433点!?!?!』』』』

「どう考えても生徒が取れる点数ではありませんよ!?!。一部の教師よりも高いじゃないですか!」

「だが事実だ。．．．とまあ、俺が点数出しすぎたせいで生徒で敵う奴がいる筈がないってことで姫路に代表は変わってもらったんだ。試召戦争は代表だけ倒せば勝ちだからな。下位クラスにもチャンスを与えるというわけで。．．．とまあ、姫路に代表を任せるのはそういう訳だ。今は理解できなくてもいい、いずれ慣れるかな。ここまでで質問はあるか?」

芳樹がそういつて手を上げるものは誰もいない。どれほど信じられない内容でもそれが事実である事には変わりないというのをしっかりと理解しているようだ。．．．一人を除いて

「．．．アキ、質問は何だ?」

「いつ帰ってきたの?」

「今はどうでもいいな、後で話す。それで二つ目の話．．．観察処分者である大バカのアキがここ、Aクラスにいる理由だ。」

「えっ、なに、僕の話?」

「．．．お前はもう黙っておけ」

明久の回りからの視線がさらに鋭くなる。相変わらずのバカさ加減に頭に手を押さえ明久を黙らせる芳樹。．．．がここで何かを閃く。

「．．．ん?、いやまてよ。．．．よし、アキ。お前も一回前に来い」

「どうして?」

「いいから、いいから。あ、高橋先生にも頼みが」

「なんか嫌な予感しかしないんだけど．．．」

渋々、前に来る明久。もちろん、今でも回りからの目は変わっていない。明久が来る前に小声で高橋先生との話もつけ明久が前にくる

「よし明久、今から姫路と戦え。模擬戦争だ。高橋先生お願いします」

「総合科目、承認します」

「何でいきなりそういう話になってるの!?!」

「お前に元から拒否権はないが……今戦ってAクラスに続けるのと、戦わないでFクラスに行くの、どっちがいい?あ、それと姫路も本気でやれ、別に模擬だから戦死の前で止めれば点数も戻るし問題はない」

「わかったよ、やればいいんでしょ!行くよ姫路さん!吉井明久、
試獣^{サモン}召喚!」

「2年Aクラス姫路瑞希、試獣^{サモン}召喚!」

二人が叫ぶと、その足元には本人に似た可愛くデフォルメされた……
……召喚獣と呼ばれる非科学的な物体が現れた

「……さてと、これから俺を楽しませてくれよ。……アキ」

第一話（後書き）

感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3747y/>

バカとAクラスと試験召喚戦争

2011年11月17日00時09分発行